



TITLE:

# 記事 ドナルド・ウィンチ教授特別講演会

AUTHOR(S):

八木, 紀一郎; 山田, 晃嗣

---

CITATION:

八木, 紀一郎 ...[et al]. 記事 ドナルド・ウィンチ教授特別講演会. 経済論叢 1992, 150(2-3): 114-115

ISSUE DATE:

1992-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/44853>

RIGHT:

# 經濟論叢

第150卷 第2・3号

---

## 哀 辭

故岡部利良名誉教授遺影および略歴

フランス18世紀のプロテスタント……………	木 崎 喜代治	1
1950年代住友金属工業の銃鋼一貫企業化過程…	張 紹 喆	25
フォードにおける経営再建の過程と合理化……	平 野 健	39
ローカル・ミニマム論の検討(1)……………	李 昌 均	58
アメリカにおけるマーケティングの生成(1)…	栗 村 俊 夫	82

## 研究ノート

社会主義と商品経済……………	八 木 紀一郎	101
----------------	---------	-----

## 追 憶 文

人情の人岡部利良先生……………	河 合 信 雄	109
岡部先生を偲びて……………	中 居 文 治	111

## 学 会 記 事

---

平成4年8・9月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 記事

## ドナルド・ウィンチ教授特別講演会

1992年5月7日午後、本学特別講義室で、イギリスの代表的な経済思想史家であるドナルド・ウィンチ教授（サセックス大学）の特別講演会が催された。そのタイトルは、「自由貿易、コスモポリタニズム、そして国民性の経済学」であり、EC市場統合の完成を目前にした時点でイギリスの経済学の特徴をふりかえってみようとするものであった。要旨は以下のようであった。

私は国際経済学からはじめて経済学の研究にはいったが、ここで標準的理論になっている多角的自由貿易論は、アングロ・アメリカ経済学の自由主義的伝統の基軸をなしている。たしかにアダム・スミス以来、リベラルなコスモポリタニズムがイギリス経済学を貫通している。しかし、より仔細にみると、国民の安全という立場から自由貿易の原則に例外を認めようとしたマルサスや関税同盟の利点に関して論争をひきおこしたトレンズのように、国民、あるいは諸階層の複雑な利害関係を対象とした議論もなかったわけではない。その繁栄の絶頂期のイギリスでは、ケアンズやバジョットのようにイギリス繁栄を経済学と結びつける見解がみられたが、他方では、コールリッジ以来、経済学のおよぼす無国籍化傾向を嘆く見解も見られる。コブデン、ブライトらの自由貿易論は経済学というより信条のようなものであり、これに対してチェンバレンが挑戦することになる。しかし、スミスにせよマーシャルにせよ、経済学者の自由貿易支持はこうした議論とは性格が異なる。スミスは後発国にとって自由貿易が賢明な政策とは考えていないし、マーシャルも幼稚産業保護の利点を知っていたのである。国民的利益を正面に押し出して自由貿易の伝統から離反した経済学者はケインズであり、彼はそのため経済の政治化に責任があるとされるが、ケインズはその危険を察知していた。現在イギリスではEC統合を前にして国論が割れている。両大戦間にケインズが占めていたナショナリズムの立場に現在マネタリストがいるのは皮肉だが、保守党は国家主権の喪失をおそれている。自由貿易の帝国イギリスの前に他の全ての国はとるにたらない存在になってしまうというリストの予言ははずれたが、これからはどうなるのか？ 経済発展のいまの波のなかで、コスモポリタニズムと国民

性（国民的利害）の関連がどうなるのか、これは日本の経済学者の見解をききたいところである。

ウィンチ教授は過去2回の訪日のさいにも本学に立ち寄られたことがあるが、今回は、やや長く滞在して大学院生の研究指導に協力してほしいという本学スタッフの希望にこたえられたものである。教授はこのために、2カ月の滞在期間のあいだに、アダム・スミスからケインズにいたるイギリスの経済学者を順次とりあげる連続セミナーを都合6回開かれた。英語でおこなわれたこのセミナーには、本学の大学院生だけでなく、他大学の大学院生、さらに学内・学外のすでに業績のある研究者も顔をみせ、毎回10—20人の出席する有益かつ賑やかなセミナーになった。学問の国際交流もしだいに教育・研究の実質的部分にまでおよぶ本格的なものになっていくであろうが、今回のウィンチ教授による講演会と連続セミナーは本学におけるその先駆けの一つになるかもしれない。なお、ウィンチ教授の京都滞在は、京都ブリティッシュ・カウンシルのロー德里ック・S・プライド館長のご尽力で、英国政府の著名学者派遣プログラムによって実現したものである。これを記して謝意をあらわしたい。

（山田晃嗣・八木紀一郎）